

読書への誘い^{いざな}

河合文化教育研究所 所長 木村 敏

本を読むということには、どんな意味があるのだろうか。それは私たちの心に何をもたらすのだろうか。

たくさん本を読めば確かに知識は増える。また本を読むことによって今まで知らなかった未知の世界を垣間見することもできる。それはもちろん望ましいことだろう。しかし現在のネット社会の時代には、知識も瞬間的な体験もネットから手軽に得ることができるともいえる。だが、そこから得ることができるような断片的な知識や表層の経験をどれだけ数多く寄せ集めても、人生を豊かにしてくれる「教養」というようなものは身につかない。

教養とは、私たちの心を深く耕すものことである。ひとまずこう言ってもいいだろう。それを通して、幅広い視野や洞察力、深い思考力が生まれ、そこから私たちは世界を見る目を養うと同時に、また「自分とは何か」、「生きることは何か」といった根源的な問題を考えることができるようになる。そうすると、この世界のうちに自分一人では存在することができないこと、自分が自分であるためには必ず他者の存在が必要になってくることもわかってくる。生きるとは、世界のうちで、互いに傷つきやすく脆い身体をかかえながら、他者と支えあい交流しながらともに存在することである。その自覚のなかから、他者に対する想像力も生まれてくる。そのことが私たちの心をいっそう豊かなものにしていくのである。

では、教養を自分の中で培うには、つまり心を耕すにはどうしたらよいのだろうか。それは、良い本を読むことである。良い本とは、ある時代のある場所に生きた書き手が、彼が生きた時代の矛盾に向き合い格闘し、苦しみ考えながら自己の内的必然性に促されるようにして書いた本のことだと言ってもいいだろう。そうして書かれた本を、ゆっくり時間をかけて読む。そうすることによって読者は、いつの間にか書き手が生きている、その人だけの世界に入り込むことになる。本の書き手の生きているこうした世界こそが、一つひとつの知識や情報を、目に見えないかたちで背後からつなぎ、読む者の心に奥行きを与えてくれるような意味を発酵するのである。

ある人が歳月をかけてつくりあげたその人だけの世界に、時間をかけて持続的に住み着き、彼の体験や思考をその内側から自分の中に取り入れるということになると、やはり読書以外に手段はない。すぐれた書き手の世界を深く体験することで、読者の心は豊かになり、さまざまな感性が磨かれていく。こうしたことのすべてを教養だといってもいいかもしれない。そしてその教養はまた、この社会の矛盾がどこから生まれてくるか、その社会と自分との関係についての認識をも促し、同時に、遠くで困窮の中にいる見えざる他者へのまなざしをも深くする。それは、この社会の矛盾への批判精神を養うとともに、振り返ってその中で自分の位置とありようを対象化し、他者としていねいに向き合おうとさせもする。

こうした意味での教養の培養を願って、若いみなさんの心に届けたいと願って作られたのが河合文化教育研究所の本冊子『わたしが選んだこの一冊』である。2010年の創刊からこれまで8年間にわたって発刊し、その総計は60万部を超えることになった。多くの若い読者に支えられてきたお蔭である。8号までは、河合文化教育研究所の主任研究員や河合塾の講師たちが、自分の人生の中で深い影響を受けた特別な本を選び出し、短いながら熱い思いを込めて諸君に向けて書き綴ってきたものを編集して作ってきた。

本号では、従来のその形の枠を拡げて、河合文化教育研究所のシンポジウムや研究会、講演会、出版などに私たちと同じ志と問題意識をもって関わっていただいた外部の方々に依頼して、その人たちの特別な一冊について書いていただくことになった。お蔭様で、多くの執筆者の方々から心のこもった刺激的な原稿をお寄せいただくことができた。この場を借りてお礼申し上げたい。

ある時代にのつびきならない思いを込めて書かれた著者の本を、別の時代に読んで心を動かされた推薦者が、新しい時代に生きる若い人にさらにその本を手渡していく。そうしたいわば「教養」のリレーを果たそうとしたのが、『わたしが選んだこの一冊』である。そのリレーが、このような形でつながり広がってきたことを喜びたい。

教養は受験には直接の役に立たないと思われるかもしれない。しかし教養は手持ちの知識を有機的につないで、知識の量よりもその質を高め、そして諸君の世界に対する認識力を掘り起こし、ひいては思考をも強靱に鍛えてくれる。それは深いところで、諸君を大きく変え、受験という人生の関門を突破していく力をもつけてくれる。

塾生の諸君に良質の読書をお勧めするのは、まさにそのためである。